

論文要旨

氏名 清水 俊

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

ハンス・ヨナスの倫理学

論文要旨（別様に記載すること）

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、フロッピーディスク（1枚）を併せて提出すること。
(氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。)

ハンス・ヨナスはブルトマン、ハイデガーなどに師事して神学・哲学を研究していたが、有機体の哲学を経て1978年、伝統的な倫理学を批判し、伝統的な倫理学とは異なる新しい倫理学の必要性を説いた *Das Prinzip Verantwortung*. (『責任という原理』) を発表した。この著作においてヨナスは、新しい時代に対応するための責任を原理とした倫理学を提示した。そしてヨナスは、目的論的存在論という形而上学によって倫理学の基礎付けを試みる。われわれは科学技術文明によりかつてはなかった大きな力を手に入れ、未来の人間までも傷付けるようになってしまった。さらに人間は都市を囲う城壁を壊し、人間と自然の空間の境界をあいまいにしてしまった。そのためヨナスは、われわれは環境にも配慮せねばならないとした。またヨナスは、未来世代が義務を遂行する能力を思いやらなければならないとした。人間という存在がずっと続いていくためには、遠い未来までのことを予測し、われわれは未来世代に対しても責任を果たさねばならない、と考えたのである。ヨナス以外にも討議倫理学のアーベルや正義論のロールズなど未来世代を倫理的な配慮の対象とする考え方はあり、それぞれのアプローチで未来倫理を構築しようとしている。ただしヨナスは、科学技術がグローバル化をもたらした点については問題視していない。さらに、ヨナスが想定する倫理はヨーロッパの倫理学が扱ってきた倫理に限定されている。そのため、今日の人類全ての倫理を考えるにはヨナスの考察は不十分であると言える。また、従来の倫理学が倫理的配慮の対象としていた現代世代という概念も、現代になるまで想定されていたものとは言えず、現代に合わせて再定義が必要である。本稿では、現代世代とは時間的にある程度の幅があり、任意の現代世代の一人と未来世代の一人が同じ関係性であるような想定が必要なのであると考えた。ヨナスは現在の行為が生み出す因果系列を投影し未来を推測する「比較未来学」の必要性を説き、未来世代に配慮し、彼らの生存が可能であるような状態を用意しなければならないとした。

ヨナスは、新しい倫理学のために存在論から価値をも導出しなければならないとした。ヨナスは、なぜ人類の存続危機がわれわれにとって問題なのかということから問い直されなければならない、と考えたのである。また彼は、「死するもの」について独特の考えを持っていた。命あるものは死を恐れるが、存在そのものも非存在を恐れ、死する運命を感じているというのである。有機体においては死に対する恐れはより具体的なものとなるが、他方死するものがあるおかげで新しい生命の余地も生じる。彼は人工物や行為、消化器官

や有機体といったものの目的を考察し、存在そのものの目的までも規定しようとした。まず人工物や行為は概念自体に目的が宿らされていると考えられ、その目的は人間によって付与されているとした。しかし、消化器官の目的は自然由来のものである。自然の内に、すでに生命を発生させる目的があるのだとヨナスは考える。そして彼は上位のもの見られる特徴の萌芽は、下位のものに含まれていると考えた。人間において表れる主観性は、有機体のみならず、無機物の内にもすでにあったとするのである。そこからヨナスは目的に関して、存在は存在すること自体を目的としており、そのために存在にとって存在することが価値あることになる、とした。しかし人工物や行為に関する目的への時点で、ヨナスの考察は深さを欠いている。ハイデガーの目的考察を参照したうえで、目的連鎖における人工物や行為の役割についても修正が必要である。

ヨナスは有機体を基礎として、存在の目的まで推察した。存在は存在することを目的として、自らに関心を持っているというのである。そして彼は、目的を達成することは善いことであるため、存在にとって存在することは善いことであるという根本的な価値が見出せるとした。しかしヨナスの存在論には修正すべき点があった。ヨナスは進化論から多くのヒントを得て、目的論を介在させた有機体論を構築しようとした。その中でヨナスは、生物が多様化してきた事実から、多様性を積極的に目指すべき価値ある在り方だとした。有は無を恐れ、無から遠ざかるために自らに関心を持ち、積極的に策を講じる。そのうちの 하나가、多様化を目指すということだとヨナスは考えた。しかし多様化を目指すことには存続に適した存在物の量を減らす危険性もあり、積極的に多様化を目指すことは存在の存続にとって危険なことである。そこで、多様化そのものは有という在り方の中で避けられないものであり、仕方なく生じた新しい形相は種のエゴイズムによって自己肯定するというものが筆者の提示した修正案である。ヨナスはハイデガー哲学を人間中心的な考察であると批判したが、自らも人間中心的な考え方を採用してしまっている。人間を高位なものとして想定し、人間に備わる主観性を世界の中で特別な、積極的に目指されるものとして規定してしまっているのである。

またヨナスは、神学の影響から完全に脱しきれてはいなかった。倫理学を研究するようになってからも神の在り方についての模索は続いていた。しかもその神はユダヤの神であり、人類にとっての普遍的な神概念についてはなかった。倫理学においても超越的なものについての言及があり、神の存在が入り込む余地が残されている。新しい倫理学が人類全てにとって有効なものであるためには、この点が克服されねばならない。

ヨナスはさらに、責任の詳細についての議論を展開させた。そこでは従来の倫理学における責任について、行為に付随する責任は形式的なものであるとされる。処罰もまた責任の在り方であるとする。さらにヨナスは、将来なされるべき行為の決定に対する責任」を取り上げた。私の外にあるものが私の力に委ねられ、私に依存するものが私に命令することとなる。われわれは人間の連続性を守るため、相互的でない関係においても責任を果たさねばならない。そしてヨナスは、相互的でない関係における責任の例として乳飲み子を

世話する責任を挙げた。乳飲み子は存在するだけで、世話をせよとわれわれに訴えかけてきており、それだけでわれわれに世話をする責任が生じているというのである。一方的に助けを求めるといふ相互性の欠如した状態こそが、責任の原型なのだとヨナスは主張した。他方ヨナスは責任を説明するにあたり、自由との関係をうまく説明でなかった。責任が成立するためには自由意志がなければならず、そのために心的エネルギーが物質界に微量の流入をしているというヨナスの仮説は説得力に欠けるものであるし、心的な世界での自由とはどのようなものであるかが説明されていない。筆者は、ヨナスの存在論においては意志の自由の証明が不要であると考えた。人間以前の有機体にも内在していた責任性が人間の行為に対しては責任という形で表出したに過ぎず、意志が自由であるかどうかは責任の実現には無関係であると考えた。

そしてヨナスは、マルクス主義に代表される共産主義の思想やユートピアを志向する社会の危険性を指摘し、希望ではなく恐れを元にして行為選択しなければならないと訴えた。この恐れを元にするからこそ、ヨナスの倫理学における最も大きな特徴であると言える。恐れとは人間が存続しなくなることに対する恐れであり、人間の存在が変わってしまうことの恐れである。希望を元にして、進歩思想を頼りにする行為選択は危険であるとしたのである。この恐れを元にした選択こそヨナスに特徴的な考え方である。そしてそれは、永遠が不可能であることに具体性を持たせた自然科学の知識によってもたらされた考え方である。また、われわれが守るべき、変わってはいけない人間本来の姿とは何かについてヨナスははっきりとは確定しない。彼は人間のあるべき姿を「似姿」という表現を使い、今後われわれが考えていくべき課題だとしている。

最後に、ヨナスの責任倫理がどのような場面で参照され、今後どのように展開されていくべきかについて検証した。環境倫理学は環境問題を解決することを目的に発展してきた。しかし倫理学以外の理論を含む雑多なものを含む上に、論者によって目的が異なるために多くの問題点をはらんでいる。環境倫理学においてヨナスの責任倫理は取り上げられ、環境倫理学の問題点を補完できるものとして期待ができる。しかしながら形而上学を基礎としたヨナスの理論は、他の環境倫理学の理論との共存が難しい。ヨナスの理論が今後環境倫理学において生かされるとすれば、人間が存続することの意味から問い直す姿勢こそが参照されるべきである。

新しい世界における新しい倫理学の可能性について、マイケルフェルダーはサイバースペースにおいて応用できないかと考えた。結局サイバースペースは本質的にこれまでの世界と異なるものではなく新しい倫理学は必要ないとマイケルフェルダーは結論付けたが、サイバースペースによる影響が行為の本質に影響する可能性は今後も残されている。また、新しい技術の発展や、現在の文明の終焉により、われわれにはさらに新しい倫理学が必要となることが予想される。われわれによってすでに未来世代は傷付けられていると考えられ、科学技術文明以後の世代はわれわれによってもたらされた負債を抱え込むだけになってしまうかもしれない。われわれが未来世代のことを気遣っていたという事実を残すこと

が、未来世代が存続の義務を受け容れるためには必要となる。ヨナスの打ちたてた責任を原理とした倫理学には多くの問題点があったが、新しい時代におけるアプローチの一つとして意義があったと言える。そして新しい問題に対して、問いの方向を根源へと向けていくヨナスのアプローチの方法は、今後何度も参照されるものとなるはずである。